



勘違いの
工房主
アトリエマイスター

Kanchigai no
ATELIER MEISTER

英雄パーティの元雑用係が、
実は戦闘以外がSSSランクだった
というよくある話

9

時野洋輔

Tokino Yousuke

ILLUSTRATION

ゾウノセ

登場人物紹介

バンドナ

クルトのかつてのパーティメンバー。
実は賢者の弟子としてクルトを見守っていた。

アクリ

クルトとユーリシア、
リーゼロッテたち三人
の娘。
その正体は時の大
精霊にして大賢者。

ユーリシア

クルトの工房に所属する
元王家直属冒険者。常識
人に見えて暴走しがち。

リーゼロッテ・ホームロス

ホームロス王国の第三王女。
自身を呪いから救ったクルト
に惚れこみ、王女の座を捨
て彼と共に行動する。

ミミコ

ホームロス王国の第三席
宮廷魔術師にして、諜報
組織「ファントム」の頭領。

ヒルテガルド

クルトの幼馴染。
こう見えて1200年生きており、
「老帝」の二つ名を持つ魔王。

クルト・ロックハンス

本人は無自覚だが、戦闘以外の
適性ランクが全てSSSという超天才。
世界を救っても、相変わらず自分が
工房主代理だと勘違いしたまま。

プロローグ

人類の強さを試すために、あえて悪の道を突き進んだポラン教会の教皇、魔神王との戦いが終わって、一カ月が経過した。

僕——クルトは同じ工房の仲間であるユーリシアさんやリーゼさん、そして娘のアクリと一緒に、僕の故郷であるハスト村に訪れていた。

まあ、故郷といっても、死の砂漠と呼ばれていた大砂漠を村のみんなで緑化して作った町に村ごと引越してきているから、正確には故郷じゃないんだけど。

ちなみにこの前来た時は、村に来てすぐにお月見をするために、ロケットで月に出かけてしまったため、こうしてハスト村でのんびりと過ごすのは久しぶりだった。

だけれど、落ち着かない。

その理由は——

「お義母様、こちらの味付けはどうでしょうか？」

「うん、美味しいわよ、リーゼさん。クルトもきつと喜ぶわよ」

「ソフィさん、こっちの煮物もいい感じじゃないか？」

「ええ、そうね、ユーリシアさん。このまま煮込んでみましょうか。まだお芋が生茹でだからね」
 厨房で料理をしているのは、母さんとリーゼさんとユーリシアさんの三人。
 その厨房を見える位置で、僕は父さんと椅子に座って、料理ができるのを待っていた。
 父さんが微笑みながら口を開く。

「クルト、いい結婚相手が見つかってよかったな。しかも、お前は貴族になったから二人同時に結婚しても問題ないなんてすごいじゃないか。あ、もちろんお父さんはお母さん一筋だけどね」

居心地の悪い理由はこれだった。

ユーリシアさんが僕のことを、庇護対象としても護衛対象としてもなく、一人の異性として好きだと言ったこと。

リーゼさんが、実はこのホームロス王国の王女であるリーゼロッテ様で、だけど既に王族から抜けて、ユーリシアさんと同じように僕のことを好きだと言ったこと。

そして、ユーリシアさんとリーゼさんが二人で話し合い、二人ともアクリの母親なんだから、三人で結婚してもいいと言ってくれたこと。

そんな一連の話を、父さんと母さんが聞いていたらしい。

そのせいで、月面で千二百年物のワインを飲んでいる時に村人中に広まり、いつの間にか、僕とユーリシアさん、リーゼさんは結婚を前提に付き合っているという噂になっていた。

「僕……ちよつと外の風に当たってくる」

そう言うと、椅子から立ちあがって、二階のベランダに出た。

僕たちの工房があるヴァルハから遥か南に位置するこの場所の日差しは、ヴァルハと同じ季節の太陽とは思えないくらいきつい。

「頭を冷やして考えようと思っただけど、無理かな……洗濯物が早く乾くのは嬉しいけど」

僕はそう言って、母さんが干した洗濯物を洗濯籠に入れてから、少し火照った頭で考える。

ユーリシアさんとリーゼさん、二人との結婚について。

正直、二人との結婚を考えたことがないと言ったら、それは嘘になる。

何しろ、僕たち三人にはアクリという娘がいる。

それに、二人とも優しくて美人で、二人のような素敵な女性と結婚できたら——と考えるのは男だったらよくある話だと思う。

だが、同時に悩んでしまうこともある。

「パパ、何を考えているんですか？」

いつの間にか現れた——転移してきたのだろう——アクリが、僕に声をかけた。

「アクリ、用事は終わったの？」

「はい、ウラノ大叔父さんがいろいろと教えてくれました。元々世界の構造について研究なさっていた方なので、今後の賢者の塔の在り方について、建設的な意見を頂きました」

そういえば、ウラノおじさん——母さんの弟は、そんな研究をしてるって言ってたっけ。

ニコツと天使のように笑うアクリだが、その喋り方はもう立派な成人女性だ。彼女は魔神王との戦いの後、旧世界を救うために過去へと旅立ち、数千年の時を賢者の塔で生きてきた。

だから当然といえば当然なのだが、それでも、まだ慣れないな。

「もしかして、ママたちのことですか？」

「うん……まあ、そうなんだけど。えっと、アクリは僕たち三人の結婚について、どう思う？」

「……悩みますね」

アクリが見せたのは、意外な反応だった。

てっきり、すぐに賛成してくれると思ったんだけど。

「果たして、私はリーゼママとユーリママ、どちらのペールガールをすればいいのでしょうか？二人分一緒に……というのはいささか無理がありますよね」

違った、結婚式の演出プランについて悩んでいるようだった。

「……？もしかして、結婚したくないんですか？それとも、『僕なんかと結婚して、二人は幸せになるのだろうか？』なんて考えていませんかよね？」

「そんなことはないよ。確かに前までの僕だったらそんなことを考えたかもしれないけれど——」
魔神王との戦いが終わってから、僕は以前より少し、自分に自信を持つことができるようになった。ほとんど寝ていただけなので、なぜかはわからないけれど。

「だったら——」

アクリはそう何かを言おうとして、首を横に振った。

「ううん、パパはきつといろいろと考えているんですね。なら、私は何も言いません。私、お祖父ちゃんとお祖母ちゃんに挨拶してきますね」

アクリはそう言って、ベランダから家の中に入っていく。

「ありがとう、アクリ。気を遣ってくれて……」

僕がアクリにお礼を言うと、ちょうど家の中からお昼ご飯ができたと声がかかった。

リーゼさんとユーリシアさんが待っている食堂に向かう。

これ以上待たせるわけにはいかないという焦りが僕の中にあっただ。

ちゃんと返事をしないといけない。

これから始まるのは、平和になった世界を生きる僕——クルト・ロックハンスの日常の物語だ。

第1話 クルトの埋蔵金

賢者の塔と呼ばれているが、ここは正確には塔ではなく、旧世界から新世界にエネルギーを吸い上げる管の役割をしているらしい。

こんな代物を五千年以上も昔に作ったという、クルトのご先祖様、ファーストの民は本当に偉大な人だったんだなと私——ユーリシアは常々思っていた。

そして、私がこの賢者の塔に訪問したのは、墓参りをするためだ。

墓といっても、墓標が立っているわけではない。

ただ、眠っているだけだ。

「——本当に生きているみたいだな」

真空状態のカプセルの中で目を閉じて動かずにいる機械人形のユーナを見て、私はそう呟いた。

彼女は何千年もの間、アクリと一緒に過ごし、見守ってきてくれた私の分身でもある。

私は彼女の前で両手を合わせ、祈りを捧げた。

本当はクルトやリゼも連れてきたかったんだが、賢者の塔は大賢者であるアクリとその弟子しか入ることができないらしい。しかも大賢者の弟子の数は限られていて簡単に増やすことができない

いそうなので、私だけでの墓参りとなった。

「ユーナはもう動かないのか？」

故障が原因だとしたら、クルトに頼めば直せるんじゃないかと疑ってしまう。

そう思い、私はすぐ隣にいたバンダナ——クルトのかつての仲間に向かつてそう尋ねた。

「再起動は可能やで？ 部品にも異常はないからな。ただ、魂はそこにはない、ただの人形や。再起動したところで、そこにいるのはユーナではなく、元の意思も魂もない。だから、ユーナは死ぬ間際、再起動しないように大賢者様とうちに頼んで、息を引き取ったんや。まあ、本当は壊してほしかったみたいやけど、塔の管理にはユーナの演算機能が必要不可欠やからな。こうして機械の身体は封印状態にして、演算機能だけ利用させてもらってるんや。死体に鞭打つような話やけど、そこはユーナも納得してたで」

あつけらかんとした口調で、バンダナはそう説明する。

彼女もアクリとともに過去の世界に渡った一人だ。アクリのような精霊でも、ユーナのような機械でもない彼女は、定期的に身体を封印することで、ここまで生き永らえてきた。

そして今では、アクリから一時的に塔の管理を引き継いでいるのだ。

バンダナ、アクリ、そしてユーナの三人の関係性はいまわからないが、死体を利用しているというよりも、ユーナの意志を継いでいるといったように見える。

最初はクルトを利用していた嫌な奴としか思えなかったバンダナだが、アクリを見守ってきてく

れた彼女の言葉は、とても優しそうに聞こえる。

かつてクルトが所属していた冒険者パーティ「炎の竜牙」の中でクルトを蔑ろにしてきたことは許せないけど。

バンダナは、自分は大賢者であるアクリのことを誰よりも大事に思っているのに、アクリが自分よりクルトのことを大切に思っていると知って、軽い嫉妬から嫌っていたらしい。これは彼女の口から聞かされたことだ。

確かに、こいつが本当にクルトの味方であろうとするのなら、アクリの知る歴史をなぞる必要があったとしても、もっと別のやり方もあっただろう。

「なんや、睨まんといてえな。クルのことは確かに嫌いやって言っただけど、でも、それは認めているからっていうのもあるんやで？ 何しろ、偉大なるファーストの民の末裔なんやから」

「ファーストの民ね……新世界を作るために人工的に作られた人造人間……だっけ？ 古代人によって、新しく移住する世界を整備するために作られ、本来だったらそのまま使い捨てられるはずだった種族。確かにクルトの人間離れした力は——」

「それ、嘘やけどな」

「普通にはあり得ないと思っただけど……今、何て言っただ？」

私が尋ねると、バンダナはケタケタと笑いながら言った。

まるで私を揶揄っているかのような。

「だから、ファーストの民が古代人によって作られたつてのは嘘や。彼らは普通に暮らしたつた人類の一部やで。新世界を作つて人類に移住してもらつて時に、うちと大賢者様がそういう設定にしたんや」

「な、なんでそんなことを？」

バンダナは冗談でそんなことをしたかもしれないが、アクリが理由もなしにそんなことをするのは思えない。

「考えてもみいや、クルたちみたいな万国びつくり人間が人知れず生活しておつて、それが一緒に新世界に行くなんて、一部の人間からしたら恐怖でしかないやろ？ なにしろ、過ぎたる文明によって生み出された禁忌の怪物が、今にも自分たちの世界を滅ぼそうつてしてるんやからな。そやから、人間に完全に管理されている超人類を生み出した——という嘘で、民衆を納得させるしかなかったんや。ファーストの民なんていうのも、ちょうどハスト村と語呂が似てたからうちらがそう呼んだだけで、最初から村の名前はハスト村やつたで？」

私は頭が痛くなつた。

魔王を倒したと思つたら、第二の魔王が現れて、しかもその倒し方が全然わからない勇者の気分だ。

「……じゃあ、ハスト村の人間つて何者なんだ？」

「さあ？ そんなんうちが知つてるわけないやん。大賢者様はもちろん、旧世界のハスト村に住ん

でた本人たちもわからんのに」

一瞬、こいつを本気でぶん殴ってやるうかと思った。

くそつ、もしもクルトたちハスト村の住民が人工的に作られたのだとしたら、その方法を聞き出すように思ってたのに。そして、自分の能力を把握した時に意識と記憶を失うとか、出産時にリスクが高くなるとかという病気(?)も治せるはずだったんだが……そういうハスト村の住民の病気(?)も最初からだったらしい。

「でも、もしかしたら、旧世界の教会にある世界図書館なら、そういう情報もあるかもしれんな」

「世界図書館?」

「文字通り、世界中の書物が集められた図書館や。その数は数百億とも数千億とも言われとる」

「いや、待て! なんだ、その出鱈目な数字」

本って、少なくとも一冊で銀貨数枚、下手したら金貨で取引されるほど貴重なものだろ? しか

も一冊の本を作るのに膨大な時間が必要になる。

それを数千億冊も保存?

私のいる世界の最大の図書館でも、蔵書数は数万冊程度だったはずだ。

「出鱈目やあらへんで? 古代文明の識字率は九割を超えとる。食料供給率も高く、飢えて死ぬ人間なんてまずおらへんかった時代やからな。当然、食欲が満たされたら、人間は娯楽を求める。その矛先の一つが本や。知識欲やおて、物語とかそういうのが主流やけどな。製紙技術も印刷技術

も新世界とは全然違う。毎日、数え切れない本が出版されとるんや。ちなみに、この塔の下の階層にも、大賢者様が退屈せえへんように、十万冊以上の本が保管されとるで? もう全部読んでもうたみたいやけど」

「そうなのか? でも、紙って五千年も風化せずに……封印があるのか」

人間や動物を魔法晶石に封印して寿命を延ばしたように、本も同じように封印すれば、風化する心配もないのだろう。

「正確には真空保存らしいけどな……似たようなもんや」

「真空……? ああ、ユーナに施してると言ってたな、その封印。どういう意味——いや、それより、その世界図書館にハスト村の住民に関する情報があるのか?」

「世界図書館には、教皇と教皇が認めた人間しか入ることができない、教皇の書庫つてのがあってな。たとえば、禁忌の怪物を生み出した研究資料なんか保管されとる。ファーストの民は人工的に生み出した民であると教皇が宣言した時点で、そのファーストの民に関する情報は極秘扱いになるから、当然、その資料は教皇の書庫に保管されとるやろうな。そして、そこも真空保存しとるから、何事もなければ今もその資料は残つとるはずや」

バンダナの言っていることが今度こそ事実なら、確かに世界図書館に行けばクルトの秘密がわかるかもしれない。

だが、旧世界の状態は全くわからないからな。

旧世界があるという塔の下を見下ろしても霧に覆われていて、地上がどうなっているか全くわからない。

旧世界の世界図書館に行くのは不可能ということだ。

「じゃあ、私は戻るよ」

墓参りに来ただけなのに、こんなに疲れるとは思わなかった。

「ああ、大賢者様によるしゅう伝えといて。あ、それと今度来る時は、クルの作った差し入れと保存食、忘れんようにな」

「わかったよ」

私は頷くと、一時的にアクリに代わって賢者の塔の管理をしてくれているバンダナに、少し頭を下げたのだった。

賢者の塔から帰った私は、翌日、可及的速やかに解決しないといけない事態に直面した。

リーゼが舵を取り、その事態を解決するために必要な人間を工房の会議室に招集した。

第三席宮廷魔術師のミニコ、工房主オフィリア、アクリ、そしてハロハロワークステーションのヴァルハ支部長であるキルシエルに私を加えた五人だ。

「あの……なんで私が呼ばれてるのでしようか？」

元王女に宮廷魔術師、工房主という錚々たるメンバーが揃っているこの場において、キルシエ

ルが震えるように尋ねたが、私はそれを無視した。

「それで、ユーリシアちゃん、大変な事態っていうのはなに？」

ミニコが手を挙げて尋ねてくる。このメンバーを見て、ただごとではないことは彼女も察したようだ。

「それは私から説明します。今からお配りする資料をご覧ください」

そう言っつて、リーゼは私を含む全員に資料を配布した。

私はあらかじめこの書類を読んで内容を知っているのだけれども、正直何も知らずにいたかった。

その資料には、数字が羅列されている。

「皆さんは、半年前、王都においてお父様——国王陛下御用達の商会を立ち上げ、そこでクルト様の商品を卸して販売しているのはご存知ですよね？」

リーゼの問いに、キルシエルを除く全員が頷いた。

キルシエルは、「ふえ？ いつの間にそんなことになっていたんですかっ!？」と言いたそうな顔をしているが、話の腰を折るのが嫌なのか黙っていた。

「もちろん、クルト様が直接作れば国宝級の物しか出来上がりませんし、値段もつけられません。

そのため、クルト様にはレシビだけを提供していただき、提携している村で作ったワインを主商品としつつ、一部の化粧品化粧品の販売を行ってまいりました」

あくまで、クルトに自信を付けさせるために行ってきた。

クルトが考えた物がこれだけみんなに受け入れられている、そう伝えるために。

しかし――

「最初のページに書かれているのは、その収支報告書になります」

そこには、庶民なら一生見ることがないであろう数字が羅列されている。

だが、それはあくまで庶民なら――の話だ。

工房主オフィリアであれば、大きな仕事を終えればこのくらいの報酬が貰えるし、宮廷魔術師のミミコもそのくらいの金額を管理させられることがある。

「あ、あの……これが半年分の収支報告だとするのなら、あまりにも……その人件費が安すぎませんか？」

キルシエルが恐る恐る尋ねた。

「そういえばそうだな。仕事のほとんどをファントムに任せているのか？」

オフィリアが不思議そうに尋ねた。

商会の警備に、ミミコはファントムの一部を貸し出している。

諜報員として教育を受けた彼女たちは、戦いだけでなく、潜入のプロでもあり、当然、店の従業員として働くこともできる。

そして、その報酬は王家の予算から支払われているので、給与を支払う必要がない。

人件費を抑えられることこの上ない。

しかしリーゼは首を横に振った。

「いいえ、ファントムの皆さんには裏からの警備に集中していただくため、表の警備や接客は普通に雇っている人に行ってもらっています。もちろん、高等教育を受けた優秀な方を厳選しております。そのため、かなりの額の給与を支払っておりますわよ？」

最初の頃はファントムにも従業員として働いてもらっていたが、現在は主に他の商会や他国からのスパイの捕縛に専念してもらっている。そして現在でも、週に数人は捕縛されている。

「では、この給与は？」

「そもそも、キルシエルさんの勘違いですね。これは半年分の売り上げではございません。一日分の売り上げです」

「ふええええええつ!?!」

そう言った時、驚きの声を上げたのはキルシエルだけだったが、ミミコもオフィリアも驚きを隠せていなかった。

彼女たちは直接、クルトの商会を見たことがあるので、キルシエルのように半年分の売り上げなどとは勘違いしていなかったはずだ。しかし、それでも一週間分くらいはあるだろうと思っていたに違いない。

「しかも、その金額はあくまで店の売り上げなんだよ。ワインや化粧品の中でも高品質なものは、週に一度、オークションで販売されている。その額は次のページに書かれている」

私はそう言って、紙を捲らせる。

そこには、目を覆いたくなるような大金が書かれていた。それこそ、大都市の予算規模の数十倍の売り上げになっている。

「ミミコ、知っていたのか？」

「ある程度はね……本当はもう少し安く売りたいんだけど、他の商会からこれ以上値段を下げないでって言われているのよね」

クルトのワインを飲んだ人は、口を揃えて「これを飲んだら他のワインを飲めなくなる」と言う。それほど美味しいという表現であるのだが、実際にクルトのワインを飲むために節約をし、それ以外のワインを一切飲まなくなった貴族が何人かいた。

そのため、クルトのワインの値段が下がって顧客層が広がれば、同じような貴族が現れかねないから、値段を下げないでほしい——と要望があつたそうだ。

化粧品も似た感じになっている。

同様の理由で、販売数を増やすこともできず、結果としてクルトのワインや化粧品の希少性がさらに上がり、オークションでの値段が上がり上がったのだ。

「それで、ユーリシアちゃん、私たちが集められた理由を教えてくださいませんか？ 店の売り上げは確かに凄いけど……ねえ、クルトちゃんの貯金、今いくらあるの？」

「最後のページを見てくれ」

途中にも膨大な商会の資料があるのだが、それらを飛ばして私は最後のページを見せた。

現在の商会の、つまりはクルトの資産である。

その金額は——既に国家予算の数倍にも膨れ上がり、誰にも使われることなく埋もれていた。差し詰め、クルト埋蔵金だ。

「問題はその資金の管理を行っているのが国王陛下下つところなんだよ」

商会の商品の開発者を秘匿するため、クルトの商会ではあるのだが、資産の全てを国庫に一度入金し、リーゼの父である国王陛下が管理している。

そして、クルトの商会の利用客の多くが貴族だ。

その結果、貴族の資産が減り、王家の資産が増え続け、国家のパワーバランスが大きく崩れてきている。

さらに、流通している貨幣が大幅に減り、大規模なデフレが起きかねない状況になっている。

「なるほど、私たちが呼ばれた理由がわかったわ。つまり、クルトちゃんのお金をどうにか減らしたいってことよね？」

「ああ、話が早くて助かるよ。ちなみに、キルシエルは元々クルトの資産を管理していた特別顧問として来てもらった」

クルトが商会を立ち上げるまで、あいつのお金は全部キルシエルが一人で管理していたからな。

「あ、あの、私、わからないのですが、そんな一大事なら、国王陛下が貰って貴族に配っちゃえば

いいんじゃないですか？ クルト君も知らないんですよね？」

キルシエルの意見はもつともだった。

だが、誰も領かないのは、それだけクルトがみんなに愛されているからだろう。

「そこで提案なのですが、銀行を作って資産運用をするのはどうですか？」

そう言ったのはアクリだった。

銀行というのは、一世紀ほど前に考え出された制度で、個人や商会などからお金を預かり、そのお金を企業に融資し、利息で利益を得る組織のことである。

だが、結局は机上の空論に終わり、小規模のギルドや資産家がお金の貸し付けを行ったりする程度にとどまっている。

「百三十年前の銀行創設が頓挫したきっかけは、その斬新な制度に対してお金を集める力がなかったことと、なにより貴族の存在でした。貴族がお金を借りたいと申し出た時、その返済能力に疑問を抱いても、平民が開設した銀行ではそれを断る力がなかったのです……でも、今ならお金を集める必要はありませんし、ファントムさんの情報収集能力と追跡能力があれば、融資が焦げ付くりスも軽減されます。なにより、王家にパワーバランスが傾き、その王家の後ろ盾を持っている現在なら、貴族の横暴な要求を退けることもできます」

アクリがそう言うと、私たちの目の前に資料が現れた。

彼女の転移の力だ。

アクリには今日の議題についてはあらかじめ話していたので、資料を用意していたのだろう。

「確かに、銀行の有用性は私も感じたことがあったな」

祖母の山の税金が払えなくなった時、そのようなお金を借りる機関があればって思った。

私はそう言って、資料を見る。

僅か五枚の資料だが、要点はしっかり押さえられていて、草案としてはこれ以上ない出来栄えになっている。

一般人がこの内容の資料を纏めようと思っても、五枚にはできないだろう。

「ふえええええ、この資料、アクリちゃんが作ったんですか？ まだ子供なのにつ!？」

キルシエルが、「さすがクルト君の子供……」と驚いているけれど、実際のところ、この中でアクリは一番歳上なんだけどな。なにしろ、一度五千年前にタイムスリップして、長い時間大賢者として世界を見守ってきたのだから。

「私は経済の専門家ではないが、この資料を基にすれば、誰をトップに据えても失敗することはなさそうだな。しかし、クルトのお金を勝手に使うことに違いはないのではないか？」

オフィリアが尋ねた。

「パパにはいくつか融資先を決めてもらおうと思います。どの道、この大金はパパ一人で使い切れるものではありませんし、それなら、パパが必要と思うところにお金を使おうかなって思うんです」

「なるほど——今でもクルトには工房の資金の寄付先を決めてもらっているから、その延長のよ
うなものか。それで利益が出ても出なくても、クルトに報酬という形でお金を渡せばなおいいな」
工房の収入の何割かは、孤児院や病院等に寄付をしていて、その寄付先をクルトに決めてもらっ
ている。

クルトは「僕なんかこんな大切なことを決めていいんでしょうか?」と言っていたが、時折孤
児院などから届く感謝の手紙を見て嬉しそうにしていた。

融資と寄付の意味合いは全然違うが、しかし、いい判断だと思う。

「じゃあ、銀行の創設……をしたいが、誰がその銀行のトップ——頭取とやらになるんだ?」
組織を作るには責任者が要だ。

アクリの草案のおかげで、最低限のお金の扱いを理解している人間であれば、誰にでも務まる役
職になっているが。

「かなりの大金を扱うことになる。信用のおける人物でない」と

「ファントムは影の人間だから使えないし」

「貴族と王族のパワーバランスをこれ以上弄るのは困りますから、平民の方がいいですわね」

「パパのことをある程度知っている人がいいですね。もちろん、成人した方で」

オフィリア、ミミコ、リーゼ、アクリが、私が最初から見つけていた人物に視線を集めた。

「そういえば、キルシエル。商会を立ち上げるまではクルトの莫大な資産、一人で管理してたよ

な?」

「ハロハロワークステーションは様々な職種の方と接する機会が多いですから、どのような企業に
どのような資金が必要か、だいたいわかりますわよね?」

「クルトちゃんと関わった時点でキルシエルちゃんのこと調査したけれど、身内にも友達にも不
審な点はなかったわね」

「安心しろ、しばらくは私たちも手助けをする」

オフィリア、リーゼ、ミミコ、私が口々にそう言うと、キルシエルが困惑して「ふえええ」と意
味不明な声を上げる。

そしてアクリが、そんな彼女の横に立って袖をちよんと掴み、「よろしくね、キルシエルお姉
ちゃん」と幼女ならではの満面の笑みで言った。

そもそもが、ここにいるメンバーに頼まれた時点で彼女に退路があるはずもなく、彼女は不承
不承といった様子で頷いた。

まあ、世界初の、しかも大賢者主導による銀行の頭取だ。

彼女が何をしても失敗するはずがないので、世間一般の人間から見たら大出世である。

「銀行の法関係については私が動きますね。お父様に頼んで早速議会で法の制定をさせんと」
娘に甘いあの国王陛下なら、二つ返事で了承するだろうな。

「なら、私とオフィリアちゃんは箱と職員の準備かな?」

「さすがに今から建てるとなると時間も必要だから、しばらくは中古の建物になるだろうが、幸い ヴイトウキントの件で主が不在となった屋敷がいくつか売りに出されている。それを改装しよう」 ヴイトウキントは七つの国に認められるほどの工房主アトリエ主だったのだが、とある事件を起こし、既にこの世にいない。そのため、各地にあった彼の所有物件が空き家になってきているのだ。

これなら、場所の件はミニコとオフィリアの二人に任せておけば問題ないだろう。一番の問題は、融資先を決めるという大役を、クルトが引き受けてくれるかどうかなんだが…… まあ、どうやって説得するかは後で考えよう。

こうして、世界初の銀行創設はトントン拍子ひょうしで進んでいき、そして――



「え？ 僕が融資先をっ!？」

突然、ユーリシアさんが僕――クルト・ロックハンスに、これまで経験したことのない仕事を頼んできた。

「ああ、銀行の融資先だ。銀行についてはわかるか？」

「はい。少し前に、ホームロス王国新聞に書かれていました。お金を預けたり、貸したりする機関……なんですよね？」

「おおむねその認識であっているよ。ただ、できたばかりの機関でな。クルトには、どういうところに融資をしたいか考えてほしいんだ。どこに融資したら銀行が儲かるか、ではなく、クルトがここにお金を融資したいなっと思うところを教えてください」

「採算度外視ってことですか？ 大丈夫なんですか、それ」

「ああ、問題ないよ」

うーん、開業開始時のサービス融資ってことかな。

まずは世間に銀行がどういう機関か知ってもらうための慈善活動じぜんみたいな。

なんでそんな大事な仕事に、僕が選ばれたんだろう？

でも――

「……やりませう」

僕はそう言った。

それに、ユーリシアさんが目を丸くする。

「え？ いいのか？」

「はい。ユーリシアさんが僕のことを信用して任せてくれる仕事なんですから、精一杯頑張らせてもらいますー!」

「あ……ああ、あんまり気負わずにな。クルトが、こういうお店にお金をもっと渡せればなあ、とか、こういうことにお金をかけたら嬉しいのになとか、そう思えるところを教えてください」

ユーリシアさんはそう言っただけで、とりあえずその場で融資できる資金として、金貨百枚を渡してくれたのだった。

「王都に来るのも叙勲式以来だな」

転移石を使って王都に来た僕はとりあえず、歩いて見て回ることにした。

普段暮らしているヴァルハの何千倍もの人が住む王都の街だ。歩いて全て見て回るだけでも数日はかかる。

それに、人が住む独特な臭いがする——と言ったら聞こえはいいけれど、正直、臭い。

「んー、やっぱり都会は慣れないな」

とりあえず、今日はリーゼさんが用意してくれた栞通りに行けばいいんだよね？

でもこれに書いてある内容って、レストランはともかく、散歩すると気持ちのいい小川沿いの道とか、景色が綺麗な塔とか、あんまり融資先探しに意味がない気がする。

まるでデートプランみたいだけど、でも、リーゼさんのことだし、きつと何か理由があつてのプランなんだよね？

特に塔は王都でも一番の人気スポットらしいし、高い場所からの眺めは見ていて楽しいのだろう。そう思いながら、僕はレストランが並ぶ通りに入った。

ちょうどお昼時のためか、どの店の前にも行列ができていて、入るまでに何十分もかかりそうだ。

工房主の証を見せたら、どの店でも並ばずに入れるってリーゼさんは言っていたけれど、みんなが並んでいる中で横入りみたいなことはしたくない。

どこか並んでいないお店はないかな？　と探して探してみたものの、そういう場所は高級そうなお店で、僕一人ではハードルが高そうに感じてしまう。

結局、入るお店が見つからないまま三十分が経過した。

このまま、昼食時が過ぎ去るのを待った方がいいのではないかと思った時、飲食店街から少し離れた場所に、ちょうど行列もなく良さそうなお店を見つけた。

飲食店の看板と営業中の文字もある。

ギリギリ、リーゼさんが指定した区域の範囲内だし、ここなら問題なさそうだ。

「すみません、失礼します」

扉を開けると、チリンチリンとドア・ベルが鳴った。

客が他にいないのか、店の中は静かだ。

店は汚れていないけど、清掃が行き届いているというより、客が入ってこないからだと思う。とはいえ、埃が積もっていないから廃墟ということもなさそうだけど。

入るお店を間違えたかな？

ちよつと嫌な予感だったので、そのまま帰ろうかと思ったその時——

「あの、お客様ですか？」

店の奥から来たのは十歳くらいの女の子だった。

「え？」

「お客様ですよね！」

「は、はい」

女の子に詰め寄られ、思わず返事をしてしまう。

すると、少女は一瞬間を置き、「しょ、少々お待ちください！」と言って店の奥に行く。

「お客様よ、お父さん！ 早く！ お客様が来たの！ 三日ぶりのお客様なんだから！」

店の奥から聞こえてくるその声に、やっぱり入る店を間違えたと思う反面、ここで間違えましたと言ってしまうことはできないかと腹を括り、鞆の中の常備薬を先に飲んでおいた。

「いらっしやいませ」

店の奥から出てきたのは、無精髭の四十歳くらいの男性店主だった。

さっきの子の父親だろう。

「うちはトルシエンの香辛料を扱ってるから、少々癖の強い料理が多いのですが、大丈夫か？」

「お父さん、何言ってるの。そんなこと言ったら三日前みたいにお客様が逃げちゃうでしょ！」

三日ぶりの客って言うていたけど、その三日前の客は逃げ出したのか。

「大丈夫です、えっと、値段はどれくらいですか？」

「飲み物別で大銅貨一枚」

店の雰囲気からすると高いように感じる。ただ、どれだけ使われているのかはわからないけれど、トルシエンの香辛料は少し値段が高いからそんなものかもしれない。

それにそのくらいなら、ユーリシアさんから預かったお金を使わなくても、僕の手持ちでなんとかなる。

昼食代も経費らしいんだけど、本当に食べられない料理が出てきた時に手も付けずにお金だけ払って帰った場合は、さすがに請求できないからね。

「飲み物はどうなさいますか？ 一番安いのが麦酒で銅貨三枚、水、ワインの水割り、ワインは銅貨五枚です」

店主が厨房があるのだろう店の奥に向かい、女の子が僕に尋ねる。

王都の平民街の井戸水は、水ギルドが管理していて、その値段はワインと値段が変わらない。

マーレフィスさんが王都に来た時に好んで飲んでたワインは、銅貨五枚で飲めるようなものではないけれど、安物のワインだったらそのくらいの値段だろう。

ただ、お酒はあんまり好きじゃないから、お水を頼むことにした。

しばらくすると、香辛料の香りが漂ってきた。

食欲をそそるいい香りに、思わずお腹の音が鳴りそうになった。

実際に音が鳴らなかつたのは、きつとその後のことが原因だ。

「あの……焦げてませんか？」

さつきまで漂ってきていたはずの香辛料の香りが、ただ焦げた臭いに変わってしまったのだ。

「え？ ちょっと見えますよ！」

女の子が厨房の方に行くと、また声が聞こえてきた。

「ちよっと、お父さん！ なんでまた焦がしてるのっ!？」

「バカ、セリナ。これが一番うまいカリーの作り方なんだ！ 母さんのレシピにも書いてあっただろうが！」

「絶対違うよ！ お母さんのカリー、こんな臭いしなかったもん！」

「いいから、お前は客の相手をしてこい！ 逃げられるぞ」

「あ、そうだった。一週間前みたいに焦がっている臭いで逃げられたら困るよね」

全部聞こえてるんだよな。

カリーって料理を作っているみたいだけど、ここから美味しくなるとはあんまり思えない。一度腹を括ったけれど、不安になってくる。

さつきの女の子が戻ってきた。

「お客さん、料理ができるまで、少しお話をしてもいいですか？」

「は、はい。いいですよ？」

時間稼ぎだっているのはわかっているけれど、僕は頷いた。

「お客さん、どんな仕事をしているんですか？」

「えっと、銀行ってわかります？」

「はい。噂になっていますよ。なんでも、金貸しと商業ギルドやハロワークステーションへのお金の保管を一緒にした組織で、かなり大規模になるそうですね？ バックに王家や工房、宮廷魔術師様がいらつしやるとかで預けたお金を持ち逃げされる心配もなく、お金を借りる時は他の金貸しよりも低金利だつて。でも、そんな凄い機関、個人に向けての融資よりも、大きな商会等への貸し付けがメインになるから、庶民はお金を預かってもらう方が主になるだろうって」

結構噂になっていたんだ。

新聞に書いていなかったこともいろいろ知っているようなので、彼女も調べたりしたのだろう。

……というか、十歳くらいなのに物凄く詳しいな。しっかりしてるよね。

でも、最後の方は僕がユーリシアさんから聞いた話と少し違う。間違った噂が一人歩きしているようだ。

「そんなことないですよ。銀行は個人の商店や、これから事業を起こそうとしている人にもお金を貸したりする予定です。僕も融資先を探すために、こうして街を歩いているくらいですし」

「お客様って銀行の方なんですか!? しかも、小さいお店にも貸してくれるって本当ですかっ!？」

「は、はい。でも、審査とかしないといけないし、あと大金になると返済計画書も作らないといけないので簡単にはいきませんけど」

僕がそう説明すると、女の子はその審査や返済計画書について質問してくる。



詳しくは僕も知らないんだけど、簡単に説明すると、女の子は、「んー、基本的には街の金貸しと変わらないのか。でも、全部書面に残すあたりはさすがかな。街の金貸しだと紙は借借書くらいだし」と何やらぶつぶつと呟く。

もしかして、顧客第一号になるのかもしれない——と思ったその時。

「お待たせしました。カレーとパンです」

水と一緒に、薄いパンと、そしてカレーと呼ばれる料理が運ばれてきた。

しかしその料理というのが、真つ黒なスープだった。

「どうぞ召し上がってください」

期待に満ちた店主の顔に、僕は少し顔を引きつらせる。

でも、僕のために作ってくれた料理だ。

その気持ちに嘘はないと思う。

僕は木の匙で黒いスープを掬う。

とろみがあり、スープというより、沼のヘドロを彷彿とさせる。

口に近付けると強くなる焦げた臭いへの拒絶反応に抗いながらも、僕は掬ったカレーを口の中に押し込んだ。

「うっ……」

「うまいですか？」

「……………焦げた味がほとんどで……………あまり美味しくありません」

僕がそう言うと、店主は落胆し、女の子が「やっぱり」という顔になった。

他人が作った料理を美味しくないと言うのは初めてのため、申し訳ない気持ちになるけれど、でも嘘はつけない。

どうすればいいのかなと、僕は呟く。

「クミン、ターメリック、とろみはコリアンダーによるものですか。あと、胡椒にカルダモン、シナモン。あ、クローブとナツメグは少し入れすぎですね。葉臭くなってしまう。もう少し塩を入れた方が味も纏まると思います。やっぱり焦がしてるのが最大の問題ですよね」

「待て、お前、何が入っているかわかるのか？」

店主がそんな当たり前のことを尋ねてきた時だった。

扉が開き、三人の敵つい風体の男性たちが入ってきた。

「また焦げ臭い臭いだな、店主さん」

一番前にいた、目の下に傷のある男がそう言って、僕の前にあるカリーを見る。

「こんなもん客に食わせるんじゃないよ。また保健所に通報されるぞ」

「失礼なことを言うな！ 客の前だ、帰ってくれ」

えっと、邪魔だったら僕が帰りたいんだけど、なんか雰囲気がおかしいな。

「店員さん、あの人たちは？ 知り合い……ですか？」

僕は女の子に小声で尋ねる。

「あの人は取り立て屋のロブです。うち、借金があつて……」

「ロブさんだ、口の利き方に気を付ける」

ロブさんがそう言って女の子に凄む。

「そういうことだ、坊主。厄介ことに首を突っ込みたくなかったら、家に帰りな。ああ、この料理の代金はこいつらの借金から引いておくから払わなくてもいいぞ。どうせ、店を取り上げて娘を引き渡しても返済しきれないくらい膨れ上がってるんだからよ」

そう言ってロブさんは僕を追い払おうとする。

それを聞いた店主が叫んだ。

「あと少し、あと少しで妻が遺したカリーが完成するんだ！ そうしたら、借金は必ず倍にして返す！」

「そう言われて待ってやるほど、うちも裕福じゃないんだよ。なにせ、うちみたいな弱小の金貸し、一軒でも借金を取りつばぐれると、今度はこっちが借金取りに追われる身になっちゃうんだ」

ロブさんはそう言って部下を見る。

「おい、女を連れていけ。怪我とかさせるんじゃないぞ」

「待ってくれ、せめて、娘だけは、娘だけには手を出さないでくれ」

叫ぶ店主を無視して、ロブさんの部下が店員の女の子の腕を掴み、強引に連れていこうとする。

これ以上は僕も見てはいられなかった。

「やりすぎです！」

「なんだ？ 関係ない奴はすっこんでろ」

ロブさんが僕を睨みつけた。

怖い。

でも、ゴルノヴァさんの恫喝どっかに比べたら、まだ平気だ。

「関係なくありません。僕は今度できる銀行の関係者です。皆さんのような方がいらつしやると、お金を貸す人のイメージが悪くなります」

「銀行の関係者だと？」

「そ、そうよ！ お客さんは銀行の人で、融資先を探しているの。うちに融資をしてくれるの！」

「は？」

信じられないという感じでロブさんは僕を見る。

そして、僕の肩を掴み、目を見て言った。

「やめとけ、こんなところに金を貸したら、本当に痛い目に遭あうぞ」

「お、脅しには屈しません」

「脅しじゃないって。俺たちがこの親子にどれだけ金を貸したと思ってるんだ？ いいか、この店に金を貸しても絶対に返ってこないんだ。こんな変なところに金を貸したとなったら、せつかく働

かせてもらえてる銀行をクジになるぞ」

……………あれ？

ロブさんは、僕を諭さとすように言う。

本当に脅しているのではなく、僕に優しく忠告しているみたいな感じだ。

「あの、一体いくら貸しているんですか？」

「利息含めて金貨三十枚だ。三年前に死んだこいつのカミさんのカリーはそりゃもう絶品でな、俺も足しげく通ってたんだよ。そのカミさんがいなくなつて、カリーも食べられなくなると思ってたんだが…………」

ロブさんはちらりと店主を見る。

「この男が『自分が必ずカリーを再現してみせます！ だからその資金を貸してください』って土下座するもんだからな、金貨二十枚を貸してやったんだ。さらに一年前には、その嬢じょうちゃんが、『父は必ずカリーを完成させますから、追加でお金を貸してください！ 金貨五枚でいいんです！ 返せなかつたら私が体で返します！』って泣いて頼むもんだから、それも貸してやったのによ。出来上がったのは、お前さんが食べた黒い炭のスープだ」

「えっと…………それはお気の毒様でした。でも、未成年の女の子の子を売り払うっていうのは」

「は？ その嬢ちゃん、見た目は幼いが、あれでも二十歳だぞ？ それにこっちが用意した働き先だって、ちゃんとした飲食店だし、住み込みでもいいって言ってくれてる」

えっ!? 僕より歳上だったの?

……女性の年齢ってわからない。

ミシェルさん——オフィリアさんの助手のエルフも八十歳だし、僕の幼馴染のヒルデガルドちゃんも、千二百年前に僕の作った薬で不老になったので（今は薬を作って不老じゃなくなっただけ）、当然千二百歳を超えている。それにミニコさんも年齢不詳だし、アクリなんて六千歳を超えていることを考えると、娘さんが歳上だと言われても不思議ではないのかもしれないけれど。

話を聞けば聞くほど、このロブさんっていう金貸し、まともに思えてくる。

金貨二十枚を三年間、金貨五枚を一年間貸して、利息が五枚っていうのも、金貸しの相場を考えると安い方だ。

僕が店主と店員の女の子——娘さんを見ると、二人は露骨に視線を逸らした。

「……ごめんなさい。僕が間違っていました」

「いや、別に構わない。こっちも紛らわしい言い方をしたし、この見た目だ。そういう誤解はいつものことだからな」

じゃあ、僕は本当に邪魔みたいだし、帰ろうかな?

そう思った時だった。

「ま、待ってくれ、君! 君は俺が作ったカリーのスパイスを一発で言い当てた。君ならカリーを再現できるんじゃないか?」

「えっと……すみません、そもそもそのカリーを食べたことがないので」

「レシピならある! 妻が遺してくれたものだ! 一部欠けていて読めないところがあるんだが、それでも君なら——」

たしかに、このカリーを食べて、問題点はだいぶわかった。

でも、それを改善しただけで、みんなが知っているカリーの味になる確信はない状況で、迂闊に頷くことはできない。

「レシピを見せてもらっていいですか? それと厨房も」

見せてもらったレシピは、恐らく店主の奥さんが、自分が死んだ時に見てもらったために用意したものなのだろう。自分で見返すにしても、とても丁寧な文字で書かれていた。

ただし、あちこち黒い染みができていて、解読できなくなっている。

この黒い染みは、さっきの黒いカリーによるものだとわかった。

きつと、レシピを見ながら作っていて、うっかり零してしまったんだな。

綺麗に拭き取ることもできるけれど、カリーの炭の成分とインクが完全に混じっているので、そうすると文字まで消えてしまっただけ意味がない。

そして、厨房でカリーを作っている鍋を見る。

中身は空っぽだ。一人分しか作っていなかったのだろう。

そして、鍋が真っ黒になっていた。

カリーの黒さだけではない。

煤^{すす}や過去に焦がしたカリーがこびりついているのだ。

こんな鍋だと、まともに料理を作っても炭の味になってしまう。

「店主さん、なんで鍋をこのままにしてたんですか」

「それは妻が遺してくれた鍋だ。代わりなんてあるもんか」

「いや、奥さんが遺した物でも、いえ、奥さんが遺した物だからこそ、ちゃんと手入れをしないとダメですよ。ほら、こんな風にすぐに綺麗になるんですから」

そう言つて、僕は金属特有の光を反射させる鍋を竈^{かまど}の上に置いた。

さて、あとは薪^{まき}を――

「「「今なにしたんだ!? (したの?)」」」」

店の親子とロブさんたち全員が声を揃えて叫んだ。

なにつて、見てなかったの？

「あ、こういう汚れつて重曹^{じゅうそう}で綺麗に取れるんですよ？」

「そんなお婆ちゃん^{おばあちゃん}の知恵袋^{ちえぶくろ}みたいな方法で取れる速度^{そくど}じゃなかったぞ」

「お母さんが使つてた時も鍋の底は煤^{すす}だらけだったのに」

「魔法じゃないのか？」

店主さん、娘さん、ロブさんがそれぞれ尋ねてくる。

「僕の魔法の適性はGランクなんで使えません」

魔法でそよ風ひとつ生み出すこともできない。

魔力は人並みにはあるつてミミコさんから聞いたけれど、それのできることをなんてほとんど限られている。

「あと、これは、奥さんのレシピを元に書き直したカリーのレシピです。これを元に店主さんに作つてもらつていいですか？」

「「「いつのまに書いたんだ!? (ですか?)」」」」

え？ みんなが鍋を見ている間に、ささつと書いたんだけど気付かなかつたのかな？

「つて、俺が作るのか？ お客さんじゃなくて？」

「僕が作つてもできるかもしれないですけど、店主さんが再現できなかつたら店が続けられないから意味がないじゃないですか。じゃあ、とりあえず六人前作つてみましょう」

「そうか……よし、わかった」

店主はそう言つと、早速^{さつそく}壺^{つぼ}に入ったスパイスを器に――

「つて、待つてください！ 量を書いていきますよね？ 全然違うじゃないですか!？」

「え？ だいたいあつてるだろ？」

「違います。ナツメグは三グラム多いですし、ターメリックは五グラムも少ないです！ さつきも

言いましたが、クローブ多すぎます！七グラム減らしてください」

「だああっ！薬師じゃねえんだ。そんないちいち何グラムかなんて量^{はか}つてられるかつ！適当^{たてあて}でいいだろ、こんなもん。妻だつていちいち重さなんて量^{はか}つてなかったぞ」

「それはきつと量^{はか}らなくても見てわかつたからですよ。量がわからない人に、そんなレシピを作れませんよ」

とはいえ、確かに目分量で重さがわからない人に、重さを量^{はか}つてもらうのは面倒だな。

「んー、ちよつと待つてください」

僕はレシピを書き換え、さらに鞆の中に入れていた銀貨数枚と簡単な器具を使い、金属製の匙を何本か作り出す。

「な……なあ、なんであの坊主、銀貨から銀の匙を作ってるんだ？」

「大丈夫です、ロブさん。この銀貨は王国の銀貨じゃなくて、昔の国の銀貨なので、鑄^い潰^{つぶ}しても違法じゃありません」

ハスト村にあつたお金のほとんどは、千二百年も昔の物だったので、古すぎて使えなかつた。そのため、一部は僕の貯金から両替して、こうして道具作りに利用させてもらっている。

ホームーロス王国やグルマク帝国の銀貨を鑄^い潰^{つぶ}するのは重罪だけど、古い国の貨幣^{かへい}だつたら問題ない。

「いや、そういう意味じゃないんだが……もう何から聞けばいいのか」

ロブさんが質問をしあぐねているので、僕が説明をする。

「はい、この匙は軽量スプーンです。奥様が重さで書いていたので、スパイスごとの重さに合わせて匙を作りました。なので、一人前のカリーを作るには、これをすりきり一杯入れたら大丈夫です」

「おお、確かにそれは楽だな」

店主がそう言つて、計量スプーンで六回ずつスパイスを器に移していく。

「つて、混ぜないでください！入れる順番があるんですから！」

その後も……

「先に材料を全部揃えてから鍋に入れてください！野菜まだ切つてないじゃないですか！あ、玉ねぎもトマトももつと細かく切らないと水分が出てきません」

「火力が強すぎます！最初は中火ですよ！その後弱火に落とすんです。強火にしたら時短になるとかそんなことはないんです！」

「水を入れてから中火の強めで！薪はこっちの乾燥^{かほせう}してるのを使ってください！拾つてきた乾燥^{かんそう}させていない木の枝を入れたら煤^{すす}が出て料理に入っちゃいます」

なんというか、いろいろと大変だった。

聞いてみると、この店主さん、料理の適性はFランクと、あまり得意ではないらしい。

でも僕が注意した点は、適性^{うんめん}云々とは違う気がする。

いや、手順をしつかりと守れないから、適性が低いのかな？

以前、学校で生徒を教えるのはうまくやれたつもりだったんだけど、得意な料理でこの体たらくでは、やっぱり先生には向いていないのかもしれない。

なんとか出来上がったカレーがテーブルの上に並べられる。

さっきの黒いスープと違い、美味しそう匂いがする。

ロブさんの同僚の人も席に座り、店主さんが自分を含めた全員分のカレーを器に入れ、娘さんが並べていく。

誰も食べようとしないので、僕が食べてみる。

「うん、まあ、美味しいかな」

さっきの黒いスープに比べたら、しっかりコクも旨味もあって、あの嫌な焦げた苦味がない。

これなら、たぶんお店に出しても客も文句を言わないだろう。

僕が食べたのを見て、他の人も料理を食べ始めた。

ロブさんの同僚の人たちが、「これはうまい」と評価し、パンをつけて食べていく。

それを見て一安心したのだけれど……

「俺の求めてるカレーとは違う」

「お母さんのカレーじゃない」

「ああ、レベルが低い……」

ロブさんと娘さん、店主は落胆した様子だった。

だが、僕もこれについては予想していた。

ちゃんとレシピ通り作っている。

でも、料理というのはいつでもレシピ通りに作ればいいというものではない。

野菜の切り方はかなり重要だ。たとえば、玉ねぎの切った大きさがばらけると、小さい玉ねぎの火の通りに合わせれば大きな玉ねぎは生焼けになるし、大きい方に合わせれば小さい玉ねぎは焦げてしまう。

それに、野菜の水分量によってもあとから入れる水の量の調整は必要だし、なんなら、外の気温によって香辛料の調整をした方がいいかもしれない。

こればかりは、努力と技術が必要になるんだけど、あの店主さんは刻んだ玉ねぎなら全部同じで感じだったし、これ以上の改善は難しいかもしれない。

できることといえばせいぜい、質のいい野菜や香辛料を仕入れるとかそのくらいかもしれない。

そう思っていたら――

「ちょっと皆さん、待っていてください！」

そう言ったのは娘さんだった。

彼女は僕たちの返事も聞かずに厨房に行った。

そして聞こえてきたのは包丁の音だ。

玉ねぎを切っているのだろうけれど、リズムがいい。店主さんに比べて慣れている感じがする。

続いて、玉ねぎと香辛料を炒め始めたらしい。
店主さんより速い。

それに、美味しそうな匂いがもう店内に溢れてくる。

でも、レシピで書かれている本来は水を入れるタイミングをとくに過ぎているのに、水を入れる気配がない。

どうやら彼女はわかっているようだ。

水を入れるのが早ければ焦げる心配はないけれど、焦げる寸前まで炒めれば、そのスパイスの香りがさらに際立つということに。

恐らく店主さんが玉ねぎや香辛料を焦がすのを何度も見てきた彼女は、どのタイミングで焦げ始めるか、無意識に理解してきたんだと思う。

きつと店主さんの奥さんが遺したレシピは、料理があまり得意ではない店主さんでも作れるものだったんだろう。

だけど本来のレシピは、娘さんが作っているようなコツが必要なものだったのだ。

もしかしたら、店主さんも無意識のうちにそっちに挑戦して失敗していたのかもしれない。

そして――

「できました！ カリーです。どうぞ召し上がってください」

見た目はさっきのカリーと変わらない。

でも、香りは全然違う。

さっきは僕が食べるまで誰も食べようとはしなかったが、その匂いにつられ、みんな我慢できないようだ。

みんな、木の匙に手が伸びるまでほとんど時間はかからなかった。

匂いでわかっていたけれど、食べてみてわかる。

さっきとコクや旨味が全然違う。野菜も上手に切れているし、素材の味をしっかりと引き出している。

「これだ……妻の味だ。俺が目指していた味だ」

「ああ、俺が昔食べた味だ……いや、まだあの頃の味には僅かには及ばないが」

店主さんもロブさんもカリーを食べてそう感想を呟く。

娘さんも、自分のカリーを食べて満足そうな表情を浮かべる。あ、満足そうというより、これがドヤ顔ってやつだ？

「お客様の説明がわかりやすく、私でもできるんじゃないかって思っていたらできちゃいました！」

「どうやら、奥さんの料理の腕は、きっちり彼女に遺伝していたようだ。」

「ロブさん、このカリーなら、お客さんも戻りますよね？ もうちょっと待ってくださいませんか？」

確かに、ロブさんや他の人の反応を見ると、これなら客も入るし、借金だつて返せるかもしれない